

## [学位論文審査結果要旨]

論文提出者：崔穎麗

審査対象論文：朝鮮民主主義人民共和国の「主体思想」に関する研究

論文審査委員：福原裕二教授、江口伸吾教授、李曉東教授、石田徹准教授、三村光弘主任研究員（環日本海経済研究所）

### 論文審査結果の要旨

2018年9月20日、学内審査委員4名（福原裕二教授 [委員長]、江口伸吾教授、李曉東教授、石田徹准教授）と学外審査委員1名（三村光弘主任研究員 [環日本海経済研究所]）により論文審査を行った（第1回学位論文審査委員会。三村光弘委員は当日の審査委員会への参席が叶わず、書面で審査結果及び意見を寄せた）。これに先立ち、崔穎麗氏（以下、著者）が提出した学位請求論文（以下、本論文）は、全243頁（本文187頁、資料56頁）を有し、形式上問題がないことを確認している。併せて、論文と共に提出された一連の申請書類の点検を通じて、学位請求論文の審査に支障がないことを確認している。

本論文は、全8章より成っている。これに加えて、末尾に参考文献と「主体思想形成年表」及び「朝鮮社会科学院金日成・金正日主義研究所研究員への聞き取り調査結果」（「主体思想」に関する現地での集中講義）の2点の資料が付されている。なお、本論部分は（脚注を含む）、400字詰め原稿用紙に換算して、約500枚に相当する分量を擁している。

序章では、本論文の基本的な視座が示されると共に、「主体思想」の形成と展開の変遷、その思想が北朝鮮で誕生し必要とされた意義及び思想の内容と特質、その思想の国民への教化方法と体系といった諸問題群を政治史的に解明するとの課題が提示されている。また、先行研究の検討と共に、研究の方法と構成も述べられている。特に、第2節では、日本、韓国、北朝鮮の文献が検討の対象に挙げられ、それら検討文献は、「主体思想」に関する日韓の代表的な論著であって国際的な水準を有し、また北朝鮮政治指導者の当時の演説や報告など分析素材として妥当性を持つ基本的な文献であり、現在の学問的水準をより高める目的の研究状況の整理とこれを踏まえた課題設定がなされている。

第1章では、次章以降の「主体思想」に関わる考究の地均しとして、解放後から金日成の政治権力下で社会主義体制が構築されるまでの北部朝鮮・北朝鮮政治史の展開が考察されている。その要旨は、金日成はソ連軍政下で北部朝鮮において変則的に誕生した共産党及び政権機関内で権力の足場を固めていくが、建国時に国家の首班となった時点では、その権力は脆弱なものであった。だが、朝鮮戦争とその停戦後の復旧過程で権力を確固としていくこととなる。戦争を前に指導党の南北分立を解消させた金日成は、戦時下において主要な政治勢力の排除に成功し、また戦後復旧過程では国内パルチザン派の取り込み、これらを活用した派閥の一扫、全社会の社会主義的改造、党優位の制度改変を行い、1961年9月の朝鮮労働党第四次大会までに、一元的な政治権力下での国家社会主義を確立させたというものである。本章は、主に韓国の北朝鮮政治史研究の成果を基に論述が組み立てられているが、適宜当時の資料を補完的に用い、次章以降の議論を意識した独自の政治史記

述となっている点で評価できるものである。

第2章では、「主体思想」の「主体」という言辞に着目し、なぜ「主体」の思想でなければならなかったのかが考察されている。著者は、「主体」表出の史的背景に朝鮮民族の情緒としての「情／恨」感情が潜んでいるとし、その感情の検討を通じて植民地経験により、事大を克服し、解放と独立を達成することが民族の「恨」を解くことになるという感情の形成を浮き彫りにして、解放後の朝鮮半島には、事大の対概念である「主体」を受容し共鳴する土壌が存在したと主張する。その土壌の上に、金日成の革命経験と解放後の政治的曲折、そして対抗する政治勢力を意識したナショナリズムや自国の実情・実績を顧みるべきだとの国家建設の主張が可能となった対内外的政治状況が合わさり、「主体」が主張されるに至ったとする。そこでの「主体」は、事大を克服するための愛郷・愛国であるがゆえに、事大と対をなす「主体」でなければならなかったと指摘している。本章は、「主体思想」に繋がる「主体」という言辞の生まれ出た背景や経緯、意味内容を独自のアプローチから初めて実証的に明らかにした点で評価できるものである。

第3章では、主体思想の形成・展開過程とこれを踏まえてなぜ主体思想が北朝鮮において必要とされたのかが考察されている。そこでの特筆すべき重要な成果は次の三点である。第一に、主体思想の起源（創始）について、主体思想という特定の考え方がいつ創始されたのかという点に注視するとき、「主体思想の創始は、その萌芽となった1955年の『主体』の言及時か、従来の参照体系から離脱した1963年の時点とするのが自然」との一定の見解が析出されていることである。第二に、主体思想は、マルクス・レーニン主義の普遍的真理と他国の経験を自国へ創造的に適用する判断・決定者である金日成の思想として、北朝鮮の現実的な政治社会の中で、指導者を含む構成員個々人の生活や活動、思考方式を規定する価値判断の基準として1967年12月に成立したと指摘していることである。第三に、主体思想は三つの段階を経て成立し、第1章で明らかにした政治社会的諸条件の中で、金日成の絶対的権力が確立し、彼が導く路線が「主体」という言辞で語られ、従来依拠し続けてきた対象からの離反により、「主体」思想が必要とされ成立したと指摘されていることである。本章は、一次資料に立脚しつつ、主体思想の形成過程とその内容を実証的に跡付けし、それが1967年12月に成立したとの主張を論証している点が評価できる。

第4章では、毛沢東と金日成におけるマルクス・レーニン主義の受容、主体思想の毛沢東思想からの影響を手がかりに、主体思想の朝鮮的特質は何かについて考察されている。そこでは、毛沢東と金日成におけるマルクス・レーニン主義の受容やその具現について、相似点や金日成の模倣の側面が多々見られるものの、毛沢東が事物の発展で内因を重視し、共産党内部の矛盾の克服を第一義としたのに対して、金日成は事大主義の伝統に鑑み、外因の浸透を防ぐための労働党内部の変化の革新を第一義にしたという相違も析出されている。また、それゆえに金日成は、対外的には独立を維持するために、自国が何に対応すべきなのかという選択権を得ることを重視し、また内部的には分裂を阻止するための判断・決定権を得ることを重視したという。そうした行動と態度を規定する思考こそが主体思想の朝鮮的特質であると指摘している。本章は、主体思想がマルクス・レーニン主義思想や毛沢東思想から如何なる影響を受けているか、また双方の違いは何かについて十分に論じられておらず、その点は大変残念だが、主体思想がマルクス・レーニン主義や中国の経験、毛沢東思想の巨大な影響下でも、朝鮮的特質を備えていったことを一定程度明らかにした

点は評価できる。

第5章では、主体思想がどのような集団主義的体系を通じ、国民に如何なる手法を用いて教化されているのかが、「北朝鮮において人民大衆を教養教化することにより心を掴む仕組み」である領導芸術の側面から考察されている。北朝鮮の人々は、党・国家が進める革命と建設から逃れ得ないように張り巡らされた「単位」への所属と「組織生活」により学校教育段階から主体思想を内容とする主に5つの共産主義教養が施される。また、学校教育を終えてもなお、職場や農場、人民班で行われる日常的な各種学習、講演会、総和などで教養教化は継続される。このようにして人びとは、党や国家が求める精神を察知・体得するようになり、これを内面化していくことが指摘されている。本章は、北朝鮮の国民が必読する文献を子細に検討し、これに著者が現地調査で得た情報や未刊行の資料内容を加味して、主体思想の教化の実態と内容に限りなく迫り、その一端を明らかにした点が評価できる。

補章では、著者が数年間6度に涉り敢行した現地調査の結果に基づきながら、主体思想のしたたかさの一断面について考察が行われている。そこでは、43点もの画像を示した上で、2箇所の農場、2箇所の工場、1箇所の連合企業所及び1箇所の展示館についての説明と現地で対話した人々の主体思想に関わる言説を紹介した上で、主体思想の柔軟な側面と硬直した側面を抽出している。すなわち、主体思想の柔軟性とは、その思想のどの面を自らの思考や行動で活用するかによって、その人の思考や行動が大きく変わり得るという可変性を有していることであるという。また主体思想の硬直性とは、指導者の判断・決定に関わることの最重要視、また対外的な自主選択権と内部的な判断・決定権に関わる事柄への非妥協性であるという。この主張に基づき筆者は、主体思想の柔軟な側面も硬直した側面もその思想の強靱性・したたかさの寄与していると指摘している。本章は、主体思想のしたたかさを一定の見聞により考察しようとする点で論証に乏しく、その意味で補章なのであろうが、現地調査によって得られた情報は貴重であり、それによって組み立てられた議論も示唆に富み、その点では評価できるものがある。

終章では、改めて各章の要約を通じて論点が整理され、序章で提出した課題に沿って結論が述べられ、総括が行われている。

本論文の趣旨は、北朝鮮の指導思想である主体思想について、とくに北朝鮮における「主体」の提起の持つ意味とそれが指導思想に昇華する過程と論理、そして形成された指導思想が国民に如何にして教化され、それが貫徹される領導芸術の手法、これらを含んでいる朝鮮的特質の抽出を軸に、「主体思想とは何か」の解明を試みることであった。そうした先行研究に欠けている考察を含んだ幅広い観点からの実証的検討を企図した本研究は、すでに各章ごとに挙げた評価すべき業績に加え、本研究が課題に据えた諸問題群は概ね的確に論証している点、またこれらを通じて日本における主体思想研究に新しい手法と観点を持ち込んだという点で高く評価できる。さらに、数多くの文献調査と現地調査を積み重ね、加えて他に類がない現地専門家との主体思想を巡る対話を行い、これら成果を一定程度本論文に反映させ、包括的な主体思想研究に仕上げたことは、本論文の特質すべき業績である。

しかし、本論文にも不十分な点がないわけではない。第一に、包括的な主体思想研究でありながら、各分野の最新の研究成果に目配りが利いているとは言えず、特定の分野にお

ける言及に説得力が乏しい点である。第二に、「主体」という言辞にこだわるあまり、一般的な用語に対するこだわりが若干欠けているくらいがある点である。第三に、政治史の手法に基づく研究でありながら、その検討素材とりわけ北朝鮮刊行資料の資料批判に関する丁寧な言及がなく、また論証に活用した北朝鮮文献の客観性が不明確である点である。第四に、主体思想の内在的理解や客観的記述にこだわるあまり、イデオロギーとしての主体思想に対する批判的な検討が希薄であり、また分析対象との距離感が保てていないくらいがあり、動もすれば北朝鮮の公式宣伝を鵜呑みにするか、擁護しているように誤解される素地が存在している点である。

また、以上のような問題点のほかに、本論文のオリジナリティは何で、なぜそう考えているのか、体制側の資料に依拠して検討しなければならない限界性についてどのように捉えているのか、毛沢東思想との比較の中で主体思想の特質は何なのかといった質問も示された。

これらの問題点、質問を中心として、公開審査及び第2回審査委員会での口頭試問で著者に質すことにした。

## 公開審査の結果の要旨

公開審査会は、審査対象者である崔穎麗氏の論文要旨説明、審査委員と崔穎麗氏との質疑応答、参会者（フロア）と崔穎麗氏との質疑応答の形式で進行した。

論文要旨は、崔穎麗氏が公開審査用に準備したpptを使用し、各章ごとに論点が整理立てられ、適切に説明されていた。従って、直ちに質疑応答に移った。

まず、「北朝鮮の行動と態度を理解すべく指導思想（主体思想）の解明を行った上で、現在の北朝鮮問題をその理解にそくして解決するためにはどうすればよいと考えているか」との質問に対しては、主体思想の柔軟性と硬直性について述べたが、その柔軟な側面を引き出すような形で各国が対応するのが望ましいと考えていると回答した。

この質疑応答を終えたところで、審査委員長は、三村光弘審査委員が書面で提出した審査意見を代読した。その上で、「別紙1 具体的な指摘箇所」で挙げられている指摘から、一点質問を行った。すなわち、「コメコンに加盟せず（オブザーバーも途中で辞めた）、ワルシャワ条約機構にも加盟せず、自主性を強調している北朝鮮はソ連の『衛星国家』であると言えるのか」との質問に対しては、韓国の先行研究に北朝鮮はソ連の衛星国家であったという記述があるが、私自身は衛星国家だと考えていないと回答した。

次に、「論文では、権力やイデオロギーに対する批判的な検討が希薄のように思えるが、それをどう考えているのか」との質問に対しては、先行研究では主体思想を単に権力の正当化を図る付属物のように見なしたり、批判に終始したりする議論が多かった。従って、本研究では内在的接近法に留意したアプローチを意識して展開した。客観的な記述に努めるあまり、そうした誤解を生じさせたかもしれない。権力やイデオロギーへの批判よりは北朝鮮の論理は何かを抽出することに力点を置いたと回答した。次に、「主体思想の重要な構成要素の一つである人間中心主義の根源は何か。それは朝鮮の伝統的な思想の中に見出せるものなのか」との質問に対しては、人間中心主義は主体思想の体系化に尽力した黄長

燁が主体思想の哲学的原理として構想したものであると理解している。朝鮮の伝統的な思想の中に見出せるものなのかどうかはよく分からないと回答した。次に、「体制イデオロギーとしての主体思想についてどう考えているのか」との質問に対しては、主体思想は論文で述べたように、形式主義や教条主義、事大主義を克服し、朝鮮のための革命を遂行する上での論理を提供した側面もあるが、体制を守護するための跡付け的側面や一元的な権力を維持するためのイデオロギー的側面もあると考えていると回答した。次に、「論文のオリジナリティは何か」との質問に対しては、主体思想がなぜ北朝鮮で誕生したのかを明らかにしたこと、主体の論理を「情／恨」感情という朝鮮的な思惟にそくして解明したことなどであると回答した。次に、「主体思想とは何かということについて、自分の言葉で説明して欲しい」との質問に対しては、端的に言えば、北朝鮮の人々がそのように理解しているように、人間は全ての主人であり、全てを決定する。また、自分自身の運命の主人は、自分自身であるという思想だと考えている。また、事大主義を克服するための論理だと考えているとの回答がなされた。

以上の質疑応答では、崔穎麗氏は審査委員からの質問に対して、概ね質問の意図を把握し、自らの見解が明らかにできており、適切に回答したと評価してよいと判断した。ただ、若干の応答では回答にまごついたたり、よく分からないと回答したり、審査委員の個人的見解とは一致しない回答がなされたりすることもあった。しかし、こうした回答や見解が崔穎麗氏の論文の評価や業績、学問的価値を損なうものではないと判断した。なお、参会者（フロア）からの質問はなく、参会者と崔穎麗氏との質疑応答は行わなかった。

## 最終試験結果の要旨

公開審査に引き続き、審査対象者である崔穎麗氏と審査委員一同による審査委員会を行った（第2回学位論文審査委員会）。そこでは、時間の関係で公開審査の際に確認ができなかった論文の問題点、質問事項を中心に、口頭試問を行い質すという形で進行した。

まず、「主体思想はなぜ『主体』であるのか。主体思想の朝鮮的特質は何か。主体思想はなぜ50年以上もの間、北朝鮮のイデオロギーとして生き長らえていると考えられるか」との質問に対しては、概ね論文で論証した通りの回答を行った。次に、「国家社会主義の定義は何か。北朝鮮の社会主義体制は国家社会主義と規定しなければならないのか」との質問に対しては、国家社会主義をソ連型の社会主義と同義で使用していた。北朝鮮の社会主義体制はソ連型の社会主義に首領制が被さった形の政治体制という鐸木昌之氏の体制論に倣って把握していたため、そのような認識で1961年までに成立した北朝鮮の社会主義体制を国家社会主義と記述したと回答した。次に、「主体が標榜される上での事大主義には、過去の事大主義からの克服と現在における事大主義からの克服の二重性が認められるように思うが、その2つの事大主義にはどのような相違や相似があるか」との質問に対しては、論文の検討課題ではなかったため、うまく答えられないが、1955年12月の金日成の演説で述べられたように、教条主義と形式主義の相違があるのではないかと。このことについては今後の課題としたいとの回答がなされた。次に、「資料批判について尋ねたい。金日成の回顧録を歴史過程の記述に活用しているが、史実が書かれていると考えてもよいの

か。回顧録はどこまで史実が記載されているとして扱っているのか」との質問に対しては、金日成の回顧録を歴史過程の記述に活用する際には、先行研究で史実として実証されている部分の箇所のみを用いたとの回答がなされた。

以上の口頭試問により、「論文審査結果の要旨」に記載した問題点、質問の全てにおいて崔穎麗氏が明確に適切な見解を行ったわけではないものの、概ね審査委員一同を満足させる見解の開陳ではあったと評価できる。また、若干の不明確な回答も今後の研究の中で対処できる問題であり、崔穎麗氏の論文の評価や業績、学問的価値を損なうものではないと判断した。

## 審査委員会の所見

以上により、審査委員会は、全員一致で本論文が博士（社会学）の学位を授与するのに十分な業績であると判断した。